

審査講評

北海道赤レンガ建築奨励賞「イコロの森」

建築は、その建てられた敷地から自由ではあり得ず、その土地の持つ社会的、経済的、環境的側面から多大な制約を受けるが、それらの条件のなかで、如何に創造的な解答を得られたかが問われるものである。近年、建築の持つ社会的責任が、多方面に拡大していく中であって、単体の建築としての完成度を評価することと同じように、建築を取り巻く環境やその建築を含んだまちづくり、既存の建築や街の再生、さらには自然景観や都市景観におけるランドスケープ的な側面まで建築の範囲を広げて評価することが望ましい。

『イコロの森』は、ゴルフ場計画の中止になった広大な敷地の自然を利用して、北海道の植生特性を活かしながら、建築を支える新しい北海道の景観を造るための植物の育成とそれらの展示と販売、さらにそれらを活かした庭園計画、景観計画から施工に至るまでの拠点として作られている。ここは、それらの原点である北海道の雑木林というもののあった姿やこれからのあり方を探りながら、そのプリミティブな風景を展示し、北海道の景観のあり方を探求しているところである。そのため、この土地の持つ地質、地形の特性を調査、解析しながら、この土地の歴史や先住民族を含めた居住の歴史や産業の成り立ちを紐解き、この土地の原初的なあり方を見直し、現代にあっても必要な根源的な植物、動物ひいては人間のあり方を探る姿勢が明瞭である。そのテーマを展開する全体計画は、始まったばかりであるが、自然環境を中心に据えた計画を反映して、ほとんど木造の平屋の建物は、一部がセルフビルドあったりするが、美しさに対して過剰な作業を施すことなく、極めてシンプルな切妻屋根で、のびやかな雑木林の中に佇む簡素な建築の姿は、北海道開拓の単純な景観を思い起こさせる。特に北海道に適した植物としての宿根草の育成に力を注ぐと同時に、かつてこの地で行われていた炭焼き、陶器づくりなどの復活を試みながら、自然の恵みを活かす方法を探っている。

ここには、素直に自然と向き合う姿勢が表現されているために、訪れた人たちは、その素直な表情と巧みな仕掛けと施設構成によって、大きな広がりの中にあっても、素朴な安堵感と安心感を得ることができ、せわしなく日常を過ごす都市生活者にとって心安らく、他に類を見ない優れた外部空間となっている。

これからの北海道の建築を考えるにあたって、建築を取り巻く環境としての空間に対する基本的なそして根源的な姿勢を新しく問い直しながら、新しい手法を開示しているところを評価して、「赤レンガ建築奨励賞」に値すると判断した。

(北海道赤レンガ建築賞審査委員長 大野 仰一)